

戦時中家庭雑誌の描く女性像

遠藤 織枝

1. はじめに

現代日本語の類義語を研究する際に、時代的な異同を知るには少し前の時代の日本語を知る必要がある。そのために、戦時中のラジオドラマ台本・家庭雑誌のグラビアを対象にその諸相を調査研究している。先にラジオドラマ台本の日中戦争時期の語彙を概観しているので⁽¹⁾、今回の雑誌の時期も同じ時期のものとする。

本稿では、戦時中の家庭雑誌『家の光』のグラビアに描かれる女性像を、記事中に使用されている語彙を元にして読み取っていこうとするものである。

2. 調査対象

2.1 『家の光』を対象とする理由

雑誌研究会編（1952）の『雑誌の話』によると、『家の光』は、

大正14年、当時農村が不況のどん底にあった時、これを打開しようと、当時の産業組合中央会全国の同志とはかつて協同組合精神を鼓吹すると共に農村家庭経済を合理化し、日常生活を豊かにすべく創刊されたもので最高時には153万部に達した(p. 35)

雑誌である。また、佐藤卓巳（2005）によると、

(1) 一家一冊万能主義、(2) 万人にわかる雑誌、(3) 農村のための雑誌、の原則で1937年末に146万部に上昇し、産組が農業会に改組された1943年12月には153万5000部に達している。1930年代、モダニズムの中に大衆のナショナリズムを体現した『キング』に、農村の『家の光』、女性の『主婦の友』を加えた「百万雑誌」の三誌鼎立時代が成立する。(pp. 41-43) ということ、当時の日本の大衆向け雑誌の代表的な物の1つと考えられる。産業組合中央会という全国組織の発行であるために、全国の農村・農業従事

者の隅々まで普及できた。

当時の日本は農業国で人口が最も多かった。つまり、当時の平均的な日本人が読んだ雑誌の1つと考えられ、こうした読者を対象とする雑誌の日本語は、当時の平均的な日本語と考えられるのである。

2.2 グラビアを対象とする理由

雑誌のグラビアは、一般に雑誌の初めの部分に、読者の目を引きつけるようにさまざまな工夫をこらして載せられるため、読者が多いことが想定される。また、グラビアにはその時期に話題となっている事柄が、政治・経済・海外ニュース・文化・スポーツ・ファッションなど、あらゆるジャンルの話題が載せられるので、語彙が偏らずに採集できると考えられる。

2.3 調査の対象期間の雑誌の総ページ数とグラビアページ数

ラジオドラマ台本の用語との比較上、戦時中に限ることにして、1931年から1945年までの日中戦争の期間とする。

この期間の各年のグラビアのページ数の合計と、雑誌全体のページ数の合計は以下のとおりである。

表1 雑誌全体とグラビアのページ数

年	年間合計 グラビアページ数	年間合計 総ページ数
1931	120	2110
1932	120	2656
1933	120	2666
1934	120	2664
1935	122	2664
1936	120	2736
1937	142	2736
1938	133	2760
1939	120	2904
1940	119	2856
1941	126	2280
1942	120	1536
1943	60	1182
1944	48	568
1945	8	64

1931年から1945年の間の推移としては、当初1冊の総ページ数(以下、各号のページ総数を「総ページ数」と記す)160ページのころから、グラビアは10ページ設けられ、この雑誌がグラビアに力を入れていたことがわかる。その後各号の総ページ数が増えても10ページの線は守られるが、総ページ数が飛躍的に増えると、グラビアも12ページの月が増え、最高では16ページにまで達する。総ページ数のピークは1939年で、この年は毎号242ページからなっている。

1940年からややページ数が減り始め、1942年には総ページ数が128ページと2年前から比べて100ページも減るが、グラビアは10ページを保っている。しかし、1943年3月からは4ページへと半分以下に減る。総ページ数も月ごとに減って遂には32ページにまで減るが、グラビアの4ページは変化しない。1945年は1月号が出て次は2月号と3月号が合併で出されて、休刊にいたる。

戦時中の雑誌として、1940年以降極度に紙の事情が悪化していくのがわかるが、一方で『家の光』がグラビアを重視するという姿勢は持ち続けていたことも明らかである。

2.4 グラビアの記事の内容概観

まず、当時のグラビアの記事がどのような内容のものであったかをみる。その方法としては、該当期間中のグラビアのすべての見出し959の文や語句に使われた中心的な語をキーワードとして各見出しに貼り付け、それらの語句を内容ごとに整理統合して、大きな項目にまとめる、という手順で行う。キーワードの見出し数が多いものから順に並べると以下になる。(漢字は新字体に改め、仮名遣いは記事のままにしている。なお(1938/5)は、1938年5月号の意。)

キーワード	見出し数	見出しの例
1 戦争・戦場・戦線・国防	216	凱旋将軍と新最高指揮官(1938/5)
2 季節・自然・植物・花	105	夏は波から(1932/5)
3 外国関係・海外	59	ソビエツト・ロシア産業組合情報(1934/8)
4 皇室・紀元節・帝室	58	輝く皇太子殿下の御姿(1935/2)
5 女性	56	愛国女性の第一線(1937/11)
6 組合・家の光	56	協同の力こそ国の護り(1939/1)

7 娯楽・スポーツ・相撲	49	血を湧かす国技 (1937/2))
8 時局・時事問題・写真	38	かうも変った時局型世相 (1938/9)
9 観光・富士・風景	34	暁の富士(1937/1)
10 農業・農村・農民	33	村の設備は一切共同で(1939/10)
11 名士	30	名士とその母 (1937/3)
12 日本・日の丸・日満	29	燦たり日の丸 (1935/1)
13 動物	29	動物園の人気もの(1939/8)
14 郷土・国内・聖都	28	伝統を誇る秋田の農民祭(1940/2)
15 子ども・少年・少女	25	可愛イオ手テノ貯金局(1939/2)
16 産業・職業・商売・製造	24	野生芋麻を採らう(1940/11)
17 議会・内閣・大臣・首相	22	大臣の陣頭指揮(1942/8)
18 神宮・神社・神苑・靖国	10	二千六百年に輝く橿原神宮(1940/1)

戦争関連の語を用いた見出しが圧倒的に多く、次に自然を称えるような写真とともに美しい山の風景などが多く掲載される。3番目としては海外の出来事を写真とともに紹介するもの、4番目は皇室の人々の誕生や成長ぶり、戦線に激励に赴く皇族など、5番目に女性をキーワードとする女性関連の記事の見出しが続く。家庭雑誌であるから娯楽も重視されていて、スポーツや相撲・当該誌の中の小説家や挿絵画家などを紹介する記事も多い。

これらのキーワードを用いた見出しは、15年間の中でも、社会が比較的穏やかだった戦争の初期と、戦争末期とでは出現状況が異なり、戦争関連の見出しは初期は自然関連のものなどに比べてはるかに少なかったのが、末期には全体の見出しの過半数を占めるにいたっている。

3. 男子の代用として描かれる女性

以下、このキーワードで示された女性たちがどのように描かれているかをみていく。

グラビアには「尖端婦人職業巡り」(1931/5)「働く婦人の髪形」(1933/4)「愛国女性の第一線」(1937/11)などの見出しで、女性関連の記事も多い。量的に多いことが、質的にも女性が評価されているといえるかどうかが問題である。まず、男性との比較で女性が描かれているのが目につく。

男子との比較で描かれる中にも、a. 男子の代用としてというものの、b. 男子に負けないというものの、の2種類がある。

a. では、

例1 男子に代つて大型トラクターのハンドルを自由に操縦する力強い農村婦人。 (1940/5・下線遠藤、以下同様)

例2 出征した男子の手不足をがつちりと引きうけて、あつぱれ銃後の大和撫子ぶりを発揮する女子青年。 (1940/11)

などである。女性が活躍する記事ではあるが、その活躍ぶりは女性が自ら社会に出てその力を発揮しているというのではなく、「男子の手不足」を補うためであり、「男子に代わって」トラクターを操縦し、銃後を守るためなのである。あくまでも、男子の代用としての女性の労働である。

b. では、

例3 男も及ばぬ活躍ぶりを見せてゐる女事務員大河原房子さん。
(1933/10)

例4 同工場の女子部では、男に負けずに短剣術を行ひ、 (1939/8)

例5 組合事務員にも女性の数^{すう}(注)がめつきりふえ、男性に伍してそれに負けない華々しい活動をつづけてゐる。 (1940/7)

注：『家の光』ではほとんどの漢字にルビが振られているが、引用に際しては複数の読み方があるものについてのみルビを書き写すことにする。

というもので、「女性の事務員の数^{すう}がめつきりふえ」はしたが、女性の働きが評価されたからではなく、戦地にかり出された男子の穴埋めに起用されたものである。そして、「男も及ばぬ」活躍ぶりで、「男に負けずに」短剣術をし、「男性に伍して」華々しい活躍をするのであるが、それらは、すべて基準は男にあり、それにいかに近づくか、いかに伍するかが焦点になっている。男性より優れた女性の存在はあり得なくて、女性は男性に準ずるもので、基準となる男性にどこまで及ぶかで、女性の価値が決まるという考え方で記事が書かれている。

1939年11号には「新たに生まれた婦人熟練工」という見出しで、女性が製図をし、大きな機械を使ってボーリング作業をし、鑪のかけ方を習っている写真と記事があるが、それらも熟練工になるのは、「手不足を補ふため、男子に代つて女性を職場に進出させよう」とするための訓練である。女性が新し

い職業分野に積極的に参入しているかにみえるが、実際は戦争遂行に支障を来さないように、欠けた部分を補填するための参入の仕方であった。このことは、戦後男が戦場から戻るや、女性は再び家庭に戻っていったことから跡づけられるのである⁽²⁾。

4. 女性を表す語の類義語的考察

『家の光』グラビアにはさまざまな女性が登場するが、その女性たちは「婦人・女子・女史・夫人・乙女・娘」などの多様な語で登場している。これらの語は現在も普通に使われている語であるが、それぞれの意味内容や使用場面の違いについての分析・考察は欠かせない。その際、60年前のそれぞれの語の意味や使用状況は、類義語の異同を考える上で極めて重要な弁別資料となる。また、戦時中の特殊な用法が、その時代背景によるものとすれば、その時代と言葉との関係も抑えておく必要がある。以下にこの種の語を「女性・婦人・女子・女」「乙女・少女・処女・娘・ガール」「花嫁・妻」の3つのグループに分けて、それぞれの語の使用状況を見ていく。

4.1 「女性・婦人・女子・女」

この4語の出現度数を表4に示すが、「婦人」が最も多く、「女子」「女性」「女」と続く。

表4 「女性・婦人・女子・女」の出現数

	見出し	本文	計
女性	16	34	50
婦人	18	115	133
女子	2	71	73
女	0	38	38

4.1.1 「女性」

この語は単独でも、複合語としても用いられる。まず単独の用例からみていく。

a. 単独の用法

例6 千人針にこめる女性の護り。(1937/9)

のようなもので22例ある。これらの女性がどのような修飾語とともに用いられているか、すなわち、どのような女性として描かれているかをみてみる。「女性」を修飾する形容詞は4語あるが、そのうち3例は以下のようなものである。

例7 若き 女性のかういふ躍進が(1931/6)

例8 か弱い 女性の身をもつて国産落下傘の発達に献身的努力を捧げ
(1931/12)

例9 うら若い 日本女性の手が差しのべられてゐる。(1941/11)

「若き・か弱い・うら若い」といういずれも若さと弱々しさを表す語で、「女性」は若いことが評価され、弱いものであるというメッセージを伝えている。もっとも、そこに描かれるのは「若き・弱い」女性ではあるが、それにもかかわらず献身しているという逆説的な「若さ・弱さ」の提示である。そのような逆説的効果があるということは、とりまなおさず「女性」の語は「若い・弱い」という前提のもとに使われているということである。残る1例は「尊い」で、皇后の妹について「尊い女性の御身」(1938/4)として使われている。

「女性」を修飾する連体修飾語句としては以下のようなものがある。

[第一線に立つ女性(1940/7)・働く女性(1933/1ほか)・操縦桿を握る女性
(1940/3)]

というもので、ここでは、か弱い女性ではなく、たくましく活躍する女性を描いている。

b. 複合して使われるもの

「○○+女性」の形の複合語は次のようなもので、延べにして18語、異なりにして11語あった。

[愛国女性・アメリカ女性・勤労女性・銃後日本女性・銃後女性・青年女性・中国女性・日本女性・農村女性・某女性・有閑女性]

中でも、「勤労女性」はたびたび見出しに出現して、5回使われていた。

アメリカ・日本・中国と国名を伴うものは、どこの国とでも結合してその国の女性であることを表現するので、戦時下に特有な複合語ではない。「愛

国・銃後」＋女性、「勤労女性」などは、戦時下の雑誌の用語として、特徴的なものである。

「女性＋〇〇」の形で複合しているものでは、

[女性作家・女性訓練・女性美]

の3語があった。「女性作家」は1939年4月号で使われている。この語は現在でこそ、差別性のある「女流作家」⁽³⁾に代わるものとして、一般に使われるようになってはいるが、すでに67年前にも使われていたことがわかる。

ちなみに、当時の「女流＋〇〇」の使用例としては、

[英国女流飛行家(1931/1)・米国女流水泳家(1931/10)・女流琵琶界(1932/10)・女流柔道(1934/3)]

の4語が採集できた。伝統的な琵琶の世界と、女性が新しく活躍しだした飛行士・柔道・水泳の世界の「飛行家」「水泳家」を顕彰する文脈で「女流」が使われている。

「女性＋〇〇」の語には、接辞を伴う派生語もある。

[女性的な・女性らしい]の2語で、いずれも現在でも使われる語であるが、

例10 女性的なやさしい柳と、男性的な銀杏の緑。(1933/8)

例11 女性らしい注意力で作り上げて行く製図科。(1939/11)

のように使われていた。「女性」にはアブリオリに「やさしさ」と「注意力」があるというのである。

4. 1. 2 「婦人」

「婦人」はこのグループの4語の中で出現頻度が最も高い語である。単独でも、別の語と結合してでも多く使われている。

a. 単独の用法

「婦人」が単独で使われるものは42例あり、そのうち単数形34例、複数形8例で以下のように使われている。

例12 二千メートルの高地で干草作りにいそしむ山村の婦人。(1940/5)

例13 かくもたくましく勤労してゐる婦人たち。(1935/12)

「婦人」を修飾する語句で形容詞・形容動詞では、

例14 花と競う若い婦人たちが、花粉まみれになって働いてゐる。(1940/8)の「若い」と、「妙齡の婦人(1931/12)」の「妙齡」が1例ずつある。

例12の「干草作りにいそしむ」、例13の「勤勞している」のような、連体修飾語句としては、

[第一線に立つ婦人達(1931/2)・(1940/2)・をゝしく働く婦人(1943/2)・
祖国を護る欧州の婦人(1940/3)・挺身する『新潟食糧増産隊』の婦人たち(1944/3)]

などの例が見られた。いずれも戦時色の濃い「婦人」像である。

b. 複合して使われるもの

b-1 「婦人会」

複合して使われる「婦人」の中でいちばん多いのが「婦人会」である。

「婦人会」は、加納実紀代(2004)によると、以下のような組織であった。

この日(1932年3月18日・遠藤注)呱呱の声を上げた「大阪国防婦人会」は、半年後には東京に進出して「大日本国防婦人会」を名乗り、全国に波及した。誕生1年後には10万人、2年後には60万人と会員数を増やし、アジア太平洋戦争が始まった1941年にはなんと900万余の会員をもつ大集団にふくれあがっていた。(p. 4)

国防婦人会が発足した1932年、軍人援護のための女性団体としては、30年の歴を持ち、150万人の会員を擁する愛国婦人会があった。この会は皇族を総裁に戴き、内務省の指導監督の下に貧民救済や授産事業など幅広く社会事業も行っていた。(p. 11)

1942年2月、両会は解散し大日本婦人会に統合されることになったが、そのとき愛国婦人会は600万、それに対して国防婦人会は約1000万だった。(p. 12)

「愛国婦人会」と「大日本国防婦人会」の2つの組織があったわけで、単に「婦人会」と示されるとき、どちらのものを指すかわからなくなるが、ここではあえて分ける必要もないので「婦人会」の名称の時はそのまま同じものとして扱う。戦時下にあって、家庭から戦争を支援していくために女性が率先

して組織した団体で、村々町々の隅々まで張り巡らされて互いの行動の監視体制も担っていた。上記加納は「草の根ファシズム」と名づけて戦時中の女性の戦争責任を追及さるべき代表的組織としている。このような強力な組織であったから、「婦人会」を核にして多くの派生語・複合語を生み出していた。その使用状況は以下のようなものである。

「婦人会」だけで使うもの

例15 いたゞいた国への土産物^{みやげもの}を、婦人会の方々が持つてくださつたので、ほんたうに助かつた。(1942/12)

のように特定の組織ではなく普通名詞のような使われ方をしている。それほど、この組織が日常化していたのである。

「婦人会」の派生語としては

例15 軽機の操作を学ぶ婦人会員。(1943/2)

がある。

また、全国に張り巡らされた組織であったから、町々村々にその支部があるので、記事には[渋谷区笹塚町婦人会(1944/6)]など、町村名+婦人会のものが5例あった。それらを一般化するという「地元婦人会」の例もあった。組織名としては

[関西国防婦人会(1934/3)・大日本国防婦人会(1934/3)・愛国婦人会(1937/12・1939/12)・大日本婦人会(1942/12・1943/2・組合婦人会(1931/3)・家の光婦人会(1941/7)]

があった。全国的な女性の組織の変遷がこれらの語の出現の年に現れている。

b-2 「婦人+〇〇」のもの

[婦人運動・婦人界・婦人公民権・婦人子供・婦人子供博覧会・婦人子供服科・婦人作業服・婦人事務員・婦人熟練工・婦人巡查・婦人常会・婦人消防隊・婦人消防服・婦人職業・婦人大会・婦人団・婦人団体・婦人風俗・婦人部隊・婦人服・婦人弁士・婦人弁理士・婦人奉公隊・婦人有段者]

の、延べにして50語、異なりで24語が使われていた。「〇〇」の部分が「女性」

の複合語と重なる用法はなかった。「女性」と「婦人」の棲み分けが行われていたと言える。

b-3 「○○+婦人」のものは、

[アメリカ婦人・外国婦人・家庭婦人・貴婦人・漁村婦人・組合婦人・国防婦人・上流婦人・朝鮮婦人・日支婦人・農村婦人・ビルマ婦人・満州貴婦人・有閑婦人]

の、延べで16例、異なりで14語あった。「アメリカ婦人」については、「女性」の複合語にも、「アメリカ女性」というのがあった。「アメリカ婦人」と「アメリカ女性」とするのと、どう違うのか。それぞれの使われ方の違いを例16・17でみることができる。

例16 流石はアメリカ女性：男のする事なら何でもやるといふのがアメリカ女性の意気です。(1931/6)

例17 生花で全米を親善行脚して帰つた使節押川如水女史に学んで、日本の華道を母国に伝へようとするアメリカ婦人。(1938/7)

つまり、「男のすることならなんでもやる」人と、「日本の華道を母国に伝えようとする」人の違いを「女性」と「婦人」で区別している。従来の社会規範から離れて積極的に生きるのが「女性」で、伝統的で穏やかな稽古事を好むのは「婦人」という区別として、使い分けられている。それぞれの筆者にそのような自覚があったかどうかはわからないが、結果として異なる人物像を描く例文の中で使われていた事実が、その区別を明らかにしている。

4.1.3 「女子」

a. 単独の用法

単独で使われているものは、

例18 地方の小さな小学校で女子が小学校長に任命された例はあるが東京府下の大きな小学校に於て女子が小学校長の椅子を占めたのはこれが始めてである。(1931/9)

例19 これで男子が戦線に立つた後は、りつぱに女子で引受けられる。

(1939/11)

など10例ある。

この語は、教育関係の場で使われることが多い。すなわち、学校でクラスや体育競技の割り振りをする際の分け方を性別であることが多いため、その性別による区別の名称として使われるのである。教育の場面でなくても、例19のように、男性と対比させる場合のもう一方の性の集団を指すことばとしての用法が多い。

「女性・婦人」と比べると、「女子」は特定の個人を指すことはなくて、あるグループをグループとして表現するときに使われている。そのため「女性・婦人」には単数形と複数形があったが、「女子」には複数形はない。「女子」は集団として抽象化された概念を担っているとすれば、単数複数を考える必要がないからである。

b. 複合して使われるもの

「女子+学校・教育機関名」として、学校などの名称の一部として使われる例が多い。

[共立女子職業学校長(1931/6)・日本女子体操専門学校(1933/11)・女子学習院(1938/2)・東京女子医専(1938/2)・四国松山女子商業学校(1938/7)・女子美術専門学校(1940/9)・浜江省立五常開拓女子訓練所(1942/9)]

などの12例である。

スポーツなど競技種目の名称として用いられるものも多い。

[米国(女子水泳)(1932/2)・女子陸上(1932/8)・女子水泳飛込(1932/8)・全日本フィギュア・スケート女子選手権(1933/11)・女子四百米リレー(1934/10)・女子建国体操(1941/1)]

などの13例がみられる。

次に、「女子+団体名」のものをみる。「婦人」でみた「婦人会」のような組織が若い男女の間でも作られていて、若い女性の多くは「女子青年団」に組み込まれていた。そのメンバーであることを示す際は「女子青年」であり、その団員であることを示すには「女子青年団員」、またその地域ごとの団体の

名前としては「〇〇女子青年団」となる。

例20 女子青年団員がモンペ姿に地下足袋勇ましく救急法と繃帯実施の演習。(1934/3)

のように使われ、ほかには

[大日本連合女子青年団(1937/12)・全国女子青年団(1937/5)・埼玉県北埼玉郡中條村 女子青年団員(1942/2)]

などがある。 そのほかの団体としては、

例21 海洋少年団の向ふを張つて女子海洋青年団といふのが生れた。
(1931/10)

とあるので、「女子海洋青年団」という組織が作られたことがわかる。それは男子の海洋団に対する団体として生まれ、その名称として「女子」が冠せられたというのである。ほかには

[女子政治研究会雄弁部(1931/11)・女子基督教青年会(1932/7)・女子義勇隊(1937/12)女子消防隊(1941/9)・女子奉仕隊(1942/1)]

などがあり、それらの組織のメンバーであることを示す

[女子奉仕隊員(1942/10)・女子隊員(1944/10)]

がある。

スポーツ関係や、団体名以外では、

[女子指導員(1939/5)・女子職員(1944/3)]

などがあり、また、次の例22のように、男子部との比較で「女子部」も多く用いられている。「女子部」だけでも5例ある。

例22 女子部では、男に負けずに短剣術を行ひ、これも優秀な結果を収めつゝある。(1939/8)

「女子」の語は、単独で使用されるときと同様に、複合して用いられる際にも男女を対比的に述べるときの女性の側を指す語として用いられることが多い。また、当時の女性が属していた組織・団体名の一部として使われるものが多く、中でも女子青年団の例は多い。

これらの団体名・組織名が雑誌に多く出現する事実を通じて、こうした組織の存在が日常化していたこと、またそれに多くの女性が組み込まれていた

ことなどがわかる。

4.1.4 「女」

a. 単独の用法

「女」の語が単独で使われる例をいくつか挙げる。

例23 スタンドガール：自動車のガソリンを売る女。(1931/5)

例24 男の床屋に現れた女の美爪師、(1931/5)

例25 国民精神作興のため奮起した六千の男女修養団員が、男は白シャツ、女は白いエプロン姿甲斐々々しく、(1934/3)

例26 村中を右往左往する男も女も子供も、こと／＼く漁に。(1940/8)

例27 女は女らしく銃後の女性として、見事に出来た繭かきに余念がない。
(1938/8)

例28 村中の女といふ女が総動員で、すつかりやつてのける。(1940/10)

例29 洗濯する女たち (1936/9)

例30 大ていの女たちはリヤカーを押して棒手（行商）に出かける。
(1940/8)

例31 こゝの婦人消防隊は有名だが、こゝまでくると、女に出来ぬ仕事はない。(1941/9)

以上のように「女」の語が単独で用いられる場合、「女が～する」のような動作主体として使われる例は少ない。例23はスタンドガールの説明としての「～売る女」である。例24は「女の～」と連体修飾語としての用法で、この例としては、「女の先生(1934/3)・女の自慢(1936/9)」などもある。また、例25は、「男は白シャツ、女は白いエプロン姿」と、男との対比で「女」が使われている。これは、例26とも共通して、「男・女・子供」など、性や、年齢などでカテゴリーを分けたものを、並列する際のカテゴリーのひとつとしての「女」の用法である。この例としては

[女や子供が (1938/12)・子供も女たちも (1941/3)・足手まとひになる
年寄や女子供は (1944/6)]

などがある。ここでは、男女を並列に扱うのではなく、「男」と「女と子供」

の二分法で、はっきり、「女」は「子供」と同じレベルにおかれている。「女性・婦人」の語は、男に伍して活躍する、男手の不足を補う存在として描かれ、補填要員として一定の評価はされていたが、「女」は、子ども扱いであり、「年寄」とともに「足手まとい」になる、厄介な存在なのである。

例27・例28は「女は女らしく」「女といふ女は」のように、重ねて「女」を使う慣用的な表現の中のもので、主体的に「女」が何かをするという用法ではない。

例29・例30では「女」が洗濯したり、リヤカーを押したり動作の主体として登場するが、2例とも、「女たち」と複数になっている。

例31は単独の「女」が、「女が～できぬ」という文で主体的な行為者として単数で使われた唯一の例である。しかし、ここでは女性一般を意味していて、1人の女性が何かをするという文脈ではない。現在の日本語では、単独で「女」と呼ばれるのは犯罪の容疑者など否定的な側面のある場合だけで、一般の女性を指すことばとしては用いられないが、戦時中の雑誌でも、「子供・年寄り」と同列の扱いなどのほかは単独で「女」を動作主体として使う用法は、ほとんどみられなかった。

b. 複合して使われるもの

例32 女だてらにサージの背広に乗馬ズボン乗馬靴、男装なんかして、
(1933/6)

例33 女らしい優美さを見せた婦人事務員の詩吟体操。(1940/5)

「女だてらに」は、女性が既成観念の範疇から出て自由な行動をしようとするときに非難し、咎める意味で使われることばで、現在ではほとんど死語化しているが⁽⁴⁾、60年前には普通に使われていたのである。

「女らしい」は、「女性らしい」と同様、ジェンダー規範を示す語であるため、その規範からの解放を求める側では、この語による「女らしさ」の強制を避けようとし、男女の伝統的文化的差を尊重しようとする側は、この語を中心にすえて「男らしさ・女らしさ」の教育の重視を主張している。つまり、ジェンダーを論じる際のシンボリックな語である。今回のグラビアの記事で使われて

いたのは、例27・例33と「女らしい中に真剣な努力が現れてゐる。」(1939/11)の計3例であった。

b-1. 「女+〇〇」

このグループの語には以下のようなものがあり、主に職業を表す語について、

[女アナウンサー・女髪結・(隣組の)女組長・女事務員・女車掌・女巡警・女巡查・女仲仕・女店員]

など15例あった。

ここでは「女店員」^{じょてんいん}以外は「をんな〜」とルビがつき、「女組長」以外は職業名とともに用いられている。「女組長」こそ、この時代の落とし子である。住民の協力体制を徹底するために作られた小組織である隣組の長のことである。隣組は町や村から下りてくる指示や指令の伝達を徹底させ、配給物資の配布を効率化し、防空演習の単位としても有効に機能した⁽⁵⁾⁽⁶⁾。家父長制下の当時、一般に組織の長には男性になっていたが、男手を戦争に取られてしまい、「男に代わって」女性が組の長にならざるを得なくなって、この語が生まれた。

「女巡查」が2例あるが、先に「婦人」の項でみた[婦人巡查]との違いはどうか。現在では「警官」が一般的で、「巡查」はやや古風で口語的ニュアンスの語であるが、60年前はこの語のほうが、普通に使われていたようだ。その後「婦人警官」になり、現在は[女性警官]へ移行しつつある職業名である。その流れの中でみると、「女巡查」→「婦人巡查」→「婦人警官」という時代的差を示しているものと思われる。

これら「女+〇〇」の造語は現在では「女冠詞」とされ、避けられるようになっているものである⁽⁷⁾。

b-2. 「〇〇+女」

このグループの語は以下の4例である。

[白川女・大力女・ビルマ女・物売り女]

単独で使われる「女」がマイナスイメージを持つ現在では、「〇〇女」という語を使うとすれば、その女性を揶揄したり・罵ったりする場合に限られるが、60年前は、そうしたマイナス評価はなかったのであろうか。「大力女」には揶揄が感じられるが、その他の語は中立的な語として使われている。地名につくものは、その時代のその社会でのその土地に対する価値観により左右されるので一概には言えない。例えば、「ビルマ女」という場合、占領下のビルマの女性のことだが、その国の人々に対して当時の日本人が好感を抱いていたか、親近感を抱いていたか、差別感から蔑視していたか、などによってこの語の評価が違ってくる。

造語としては地名につくものは「白川の女」「ビルマの女」の略されたもので臨時的複合語といえる。

以上、「女性・婦人・女子・女」をみてきた。この4語はいずれも、女性を指す語であるが、その使用範囲や、意味内容は重なり合いながらもずれを見せていた。単独で使われるのが最も多いのが婦人・女性・女・女子の順で、「女」が「女が～」のような、単独の使用が抑えられているのは現在と似ていた。「女子」は「男子」との対比で使われることが多く、この語が多用されることはなにかにつけ、性差を問題にする、何かを分けるときに性が重視される社会であることの反映ともいえる。「婦人」が最も一般的であったが、特に「婦人会」のような組織名として多用されていて、当時の社会組織と女性との関わりがことばを通じて明らかにされた。「女性」が最も少ないが、当時あっては、まだこなれていない漢語として、よそよそしさが感じられ、その一方で例16の「アメリカ女性」のように、新しいことに挑戦する積極的な女性を表象する語として捉えられていたのであろう。

4.2 「乙女・少女・娘・処女・ガール」

ここでは、若い女性を表す5語を比較しながらその異同を見ていく。

この5語の出現度数を表5で示すが、「乙女」が最も多く、「娘」「少女」「ガール」「処女」と続いている。

表5 「乙女・少女・処女・ガール・娘」の出現数

	見出し	本文	計
乙女	9	64	73
少女	2	10	12
処女	0	6	6
ガール	0	12	12
娘	2	59	61

4.2.1 「乙女」

a. 単独の用法

単独で使われるのは、

例34 東北の地方色なつかしい乙女のもんぺ姿。(1932/5)

など57例あるが、こうして単独で用いられる「乙女」が、どのような語・表現とともに使われているかを調べながら、この語の使われ方の傾向・特徴を探ってみる。

「乙女」の語とともに使われる語を集めてみると、

[乙女の輝^{おも}しい面 (1931/3)・健康な乙女の皮膚 (1932/12)・乙女の明るい微笑^{はいゑ}み (1932/12)・微風^{そよかぜ}が、乙女の頬をなで (1935/1)・につこり笑った乙女の頬 (1940/12)・乙女たちの顔に増産の凱歌と安堵^{びせう}の微笑がこぼれる (1941/11)]

のように、「乙女」の「顔・頬・皮膚」に焦点を当て、それが「微笑む・笑う・綻ぶ」というものが多い。また、顔や頭の部分をいうものとして

[乙女の艶やかな髪 (1932/12)・乙女の眸 (1937/11)]

などもある。さらに、

[乙女のもんぺ姿 (1932/5)・甲斐々々しい乙女の姿 (1933/12)・乙女達の凛々しい勇姿 (1937/11)]

のように、「乙女」の「姿」に焦点を当てるものも多い。

ここで、わかるのは「乙女」という語は、若い女性を一個の人間としてみるのではなく、その人物の「顔・頬・皮膚・目・髪」という、身体の部分に焦点を当てたり、外から見られる「姿」に代表されたりして、見られる存在であることを示す語だということである。

その他には、

[健やかなる乙女(1935/7)・乙女の純情(1942/6)・乙女の愛情(1943/5)]
という抽象的な語を属性としたり、その感情の所有主として描かれる例がある。「乙女」の語には、そうした理想像・憧れの対象としての価値観が含まれ、「健やかなる・純情・愛情」という健全で、愛情豊かな状態や感情の持ち主を表す語として「乙女」がふさわしいと感じられていたのである。

この語は「乙女」「乙女たち」と単数形・複数形で使われるが、単数形の「乙女」は39例、複数形の「乙女たち」は18例であった。この単数形と複数形の使用の状況を戦争の前期中期と末期、すなわち、1931年から1939年までと、1940年から1945年に分けてみると、以下の表6のようになる。すなわち、戦争末期の方が「乙女たち」と複数形が多くなっている。戦争が逼迫してきて、多くの力を結集しなければいけないときには、個人としての乙女について述べるよりも、複数の「乙女たち」に訴えかける必要に迫られてきたのであろう。

表6 「乙女・乙女たち」の使用時期別出現数

	1931－1939年	1940－1945年	計
乙女	31	8	39
乙女たち	8	10	18

b. 複合して使われるもの

「〇〇+乙女」の語には、

[大島乙女・早乙女・銃後乙女・田園乙女]

の4語がある。「早乙女」は従来使われてきた語で、臨時に複合した語ではない。それ以外は「田園の乙女」「銃後の乙女」「大島の乙女」という、「乙女」を規定する連体修飾句を作っていた連体助詞の「の」が脱落して臨時的に1語になったものである。

「乙女+〇〇」の語には、

[乙女心・乙女部隊・乙女奉仕・乙女奉仕隊]

の4語がある。従来使われてきた「乙女心」以外は臨時的に1語となったものである。「乙女奉仕」は乙女が奉仕することを簡潔に言い切ったもので、

その集団を臨時的に「乙女奉仕隊」と言い、それに類した乙女たちの活動のグループのことを「乙女部隊」という。ここで使われる「部隊」はもちろん軍隊組織の一部としてではない。こうした造語が生まれるのは、「部隊」の語が、今回調査対象としている『家の光』のグラビア記事中に111語も使用されているほど、当時よく使われていたからである。加茂正一(1944)は当時の新語を述べたものだが、

軍隊の、本来の部隊名や、荒鷲部隊、鉄牛部隊・・・覆面部隊などといふのは別として、各方面で、団体行動が行はれると、すぐ「部隊」になる。軍国の今日、けだし、然るべき連想であらう。以前なら、何々連、何々組、或は、何々グループかグルッペなどと呼ばれたところ。(p. 13)として、「銀輪部隊・稲刈部隊・お嬢さん部隊・もんぺ部隊・仲良し部隊」など48語の「～部隊」を紹介している。

この種の複合語は今回の雑誌の中にも、[機甲部隊・皇軍歩兵部隊・落下傘部隊]などの本来の軍隊用語と同時に、文士が戦線に慰問に行く「ペン部隊」、隣組の「婦人部隊」など、さらには「全国の遺児部隊」など比喩的意味のものも多く見られる。同じ目的・状況の人々の集団を「部隊」と呼ぶことで、戦時下の緊張感を共有しようとしたのであろう。これはまた、軍隊用語が一般社会に蔓延していた言語状況の代表的な例としてもみることができる。

4.2.2 「少女」

この語の使用例は12例で、それほど多くない。その「少女」のうち「少年少女」など「少年」と対比的・合同的に用いられるものが5例あるが、こうした用例は「乙女」にはなかった。「少女」が単独で用いられるのは、

[少女達が逆立ちになつて物凄い美容体操をして(1933/11)・一少女が色の違った葡萄で考案出品し(1935/3)・害虫駆除ぐらゐは、少女だつて出来る(1938/8)]

のような文の中で使われていて、いずれも、「少女」が主体的な行為者として登場する。

例35 雪の峠路を越えて行く少女たちの類は、尊い勤労に林檎色に輝いて

ある (1942/4)

という用例もあったが、ここで描かれる「頬が輝いている」少女は、「乙女」に多く見られた用法と同じで、外見重視の表現といえるが、「雪の峠路を越えて行く」たくましい人物としては「乙女たち」の語よりもふさわしいと思われた結果「少女たち」が選ばれたのであろう。

4. 2. 3 「処女」

この語の使用例は6例だが、

[処女飛行・処女峰・処女雪]

のような比喩的用法が3例で、女性を表すのは

[ローズ島の処女が踊ったといふ瓶踊(1934/8)・青年団、処女会の人々(1935/11)・清掃に奉仕する処女会員(1937/3)]

の3例である。「ローズ島の処女」とはどのような女性だったのかわからないが、その島のしきたりで、その踊りは未婚の娘しか踊れないという風習だったのであろうか。いずれにせよ、ここで使われる「処女」は、その島が、我々の日常生活の中に入ってきていないので遠い特殊な伝統的しきたりと、特別視することもできる。しかし、後の2例は、自分たちの身近なことだと思えば笑ってすますことはできない。

「処女会」と言い、「処女会員」と言い、今から考えればずいぶん気恥ずかしい名称がまかり通っていたものである。当人たちはどう受け止めていたのであろうか。時局柄、誇らしげな呼称とでも思われていたのだろうか。戦争が、人々の言語使用の感覚を麻痺させていた例とみることができそうである。

4. 2. 4 「娘」

a. 単独の用法

単独のもので、歌や劇の題の中で使われるものがあり、

[わたしや 家持よい娘 よい娘。(1933/6)・なぜかあの娘の窓恋し(1936/10)・『ある村長の娘』(1935/5)]

などである。歌では「娘」と読ませているものがある。

動作主体としての「娘」は単数形の使用の例としては、

例36 サイパン島に住むカナカ族の娘の機織。(1933/10)

の1例で、ほかには例37のようにすべて複数形の使用である。

例37 健康そのものの浜の娘たちも、懸命に協力する。(1942/8)

動作主体として多く登場するのは「娘さん」である。軽い敬意を含む接辞を伴った用語である。「娘が～する」という書き方では硬い表現になるし、自分の娘であるかのような錯覚や誤解が起こるから避けているのであろう。

〔真剣な娘さんの顔(1935/6)・ホームスパンを織る娘さん(1935/12)〕

のように単数形のものでも12例ある。

「娘さん」も複数形で使われる例が多く

例38 群馬県高崎市の碓氷社製糸工場に働く娘さんたちの糸とり風景。

(1935/12)

など11例ある。

『家の光』のグラビアに登場する「娘さん」は、

〔林檎畑に働く娘さん(1936/9)・杉板の乾燥場に働く娘さん(1937/8)〕

など、多くは働く主体である。

例39 内地の娘さんたちよ、さあ行かう、満州の沃野へ。(1942/9)

と、戦争も激しさを増した時期には、「娘さんたち」も満州へ引き立てられるようになる。

「娘さん」「娘さんたち」の単数形と複数形の使用では、「乙女」と同じく、戦時中末期にかけて「娘さん」より「娘さんたち」が多くなる。

表7 「娘さん・娘さんたち」の時期別出現数

	1931—1939年	1940—1945年	計
娘さん	9	3	12
娘さんたち	6	5	11

修飾語では「うら若い」を付加した〔まだうら若い娘さんたち(1939/11)〕の例が1例ある。また、〔健康色の頬を紅潮させて娘さんたちの『縄とび』(1941/12)〕と、「乙女」の例で多かった「頬」に焦点を当てた例もあるが、そ

の「頬」は「健康色」に「紅潮させ」たもので、「乙女」の「頬」が「ほんのりと赤らんで(1942/6)」いたのとは違い、「娘」のほうはより健康的に縄とび運動をする主体になっている例として使われている。

b. 複合して使われるもの

「○○+娘」の例は歌の歌詞中や題名の中にみられ、

例40 わたしや十八 組合娘 汗のダイヤで身を飾る。(1935//7)

のほかに

〔『久美愛娘』・『鷺娘』はたらき娘・村娘〕

など8例ある。

普通の記事の文では、

〔イギリス娘・半島娘・軍国娘・下町娘・野良娘・花売娘・満州娘〕などの11例があった。地名につくものが6例、住む場所につくのと、仕事につくものが各2例、時局を表す「軍国」につくもの1例である。「村娘・下町娘」以外は熟していない臨時的な複合語である。なお、「半島娘」に「キチペー」とルビが振られていて、当時そのような呼ばれていたらしいことはわかるが、それがどのような語源でどのような経緯を経たものであったかは、寡聞にして知らない。今後の調査が必要である。

「娘+○○」の語は、

〔『京鹿子娘道成寺』(1934/1)・娘振り(1935/4)〕

の、舞踊の題名と派生語の2例のみである。

「娘」がつく語として、複合語ではないが「姑娘(クーニヤン)」が多用されていて、11例採集している。次のようなものである。

例41 皇軍に協力して、耕作にいそしむ付近の姑娘(クーニヤン)たち。
(1941/8)

日本軍が中国に侵略し、中国人との接触が増えてきた結果、このような中国語がカタカナ語として日本の家庭雑誌に頻出するようになった。登場するのは、

〔楽しげにそぞろ歩く姑娘(1939/9)・愛くるしい姑娘(1939/9)・紡績工

場で働く姑娘 (1940/1)・かひがひしく働く姑娘(1941/8)・梅干作りの手伝ひをする働き者の姑娘(1941/8)・すつかり言葉も通ずるやうになった姑娘(1941/8)]

たちで、中国の民間の人びとも、日本軍の駐留を歓迎し、協力的に、楽しく働いているというメッセージを発するシンボルとして、中国の若い娘が使われているのである。

4.2.5 「ガール」

外来語の「ガール」もかなり登場する。この語は単独では用いられず、すべて複合語を構成する要素としての使用である。

[スタンドガール(1931/5)・レヴユウガール(1931/5)・麻雀ガール(1931/5)・モダンガール(1931/9)・エアーガール・(1937/4)・アナウンスガール(1937/4)・食堂ガール(1938/6)]

など、新しい職業や風俗を紹介する記事の中で使われている。[麻雀ガール・食堂ガール]のような混種語の例からは漢語とも結合して新語を作るという、造語力が高い語であったことがわかる。

延べ13語、異なりで8語が採集できたが、すべて1938年以前のもので、それ以降は、「ガール」も「ガール」のつく語もいっさい使われなくなってしまう。

以上、若い女性を表す類義語が、戦時中の雑誌の中でどのように使われてきたかをみてきた。若い女性という共通項はあるものの、その使われ方では明確な使い分けが見られた。現在ではいちばん普通に使われている「少女」は12例で「乙女」の73例にはるかに及ばない。「乙女」の多用は、明るさ・微笑・けなげさを象徴する語として、当時の社会では最も好まれた結果といえる。しかし、主体的な行為者としての「乙女」はほとんどなく、行為者の役割は「娘さん・娘さんたち」が担っていた。「ガール」も複合語の構成要素としてかなり出現していたが、1938年以降はまったく使われなくなった。

戦争と言語使用の関係がこの外来語の消長に象徴的に現れている。そのほか、私的な領域を意味する語の「処女」が、戦争遂行の前に社会化され、私的な感覚は無視されること、また、「乙女部隊」のような本来「乙女」と異質

な「部隊」との組み合わせも、時局を表す語との結合として多用されていたことが明らかになった。

4.3 「花嫁・妻」

出現度数は表8の通りである。

表8 「花嫁・妻」の出現数

	見出し	本文	計
花嫁	4	24	28
妻	0	14	14

「妻」は「良妻賢母・夫妻」の熟語の造語成分や、「吾妻郡・大妻高女」の固有名詞の部分を除いて、夫に対する語で「つま」と読むものに限っている。

4.3.1 「花嫁」

a. 単独の用法

単独で使われるのは、

例42 第四次満州移民村冷達河行きの花嫁廿七名が、新潟港を出発した。
(1937/3)

などのほかに、「花嫁・花嫁さん・花嫁たち」の14例だが、この例でもわかるように、戦時中の雑誌では、版図を広げていった海外の開拓者の伴侶として送り込まれる「花嫁」が大きくクローズアップされていた。

「花嫁」たちのいでたちは質素で堅実、軍事色を帯びた装いであった。

例43 花婿は青年団服、花嫁は綿服モンペ姿の簡素な支度、(1937/5)

例44 国防色の制服もかひがひしい大陸の花嫁。(1942/9)

次の例からは、こうした「花嫁」が国策に基づく県側の積極的な働きによって選出されたものであったこともわかる。

例45 多数の移民を送つてゐる宮城県、岩手県当局では、満州へ行く花嫁さんの養成、縁組に全く涙ぐましい努力をしてゐる。(1937/5)

県当局は、先に送り出した男性の妻となるべき女性を探し、養成し、うまくマッチングさせるために「涙ぐましい努力」が必要だったのである。そし

て、めでたく縁組みが成立し、先の例42のように女性が大陸に渡ると、集団結婚式の運びとなる。

例46 六人の緞の戦士が、故郷から花嫁を迎へ厳かにも頼もしい非常時集団結婚が行はれた。(1939/7)

集団結婚式といえ、昨今では、宗教とのからみで本人の意思を無視して執り行われるものを言い、非人間的なやり方として非難されるが、60年前には国策として同じようなことが盛大に行われていたのである。

これら「花嫁」が、国策の犠牲者であったか否かについては、家長三郎(1985)は必ずしも犠牲者とは言えないとして、

まったく物心のつかぬ乳幼児は別として、女性や小学児童にも加害者としての側面があったことも、また事実である。例えば「大陸の花嫁」という賛美の声に送られて満州開拓民の妻となって入植した女性たちは、客観的にみれば、現地居住中国農民を収奪した日本開拓団に加入することによって、中国民衆への加害行為に積極的に加わったことになる。

(p. 297)

と、女性たちにも国の植民地支配政策に荷担した戦争責任があると述べている。

b. 複合して使われるもの

複合語の例は「花嫁衣装・花嫁姿・花嫁候補・花嫁学校・花嫁祭・花嫁訓練所・花嫁支度」の、延べにして13語、異なりで7語である。

「花嫁衣装」「花嫁支度」など、平時であれば「金襴緞子の花嫁衣装」「豪華な花嫁支度」などと表現され、華やかで美しく、歓びに心弾むさまを連想するのが常だが、戦時中は全く違っていた。

例47 非常時花嫁衣装は綿服(1934/10)

例48 僅か一円の利用率で立派に花嫁支度が出来るわけ、(1932/8)
など、いかに質素で、いかに節約するかが問われた時代である。「一円の利用率」とは、産業組合が結婚の簡素化を推進するために、結婚式や料理衣装などを安価で貸し出しをしていたことを指している。

「花嫁候補」「花嫁学校」「花嫁訓練所」は、大陸へ送る「花嫁」を養成する機関に関する用語で、1941年1月号には

例49 信州の高原桔梗原に、本格的な大陸の花嫁訓練所ができた。
と紹介され、翌年の9月号には、大陸にできた「花嫁学校」への探訪記事が載る。

例50 かくれたる開拓の尖兵として、右手には夫とともに建設の鋤をふるひ、左手には愛児を抱いて、家事に専念する——その大陸のよき妻、よき母を作りあげる、こゝに浜江省立五常開拓女子訓練所を訪ねて、興亜の花嫁候補の生活をさぐってみよう。

と、大陸で花嫁になるための準備の様子を探り、

例51 今度この訓練所へ入った五十四名の花嫁候補は、ほとんど東北地方の娘さんたちで、はじめ満州行きの決心を両親に打明けた時には、両親揃って反対したが、乙女心の堅い決心が、つひに父母を説き伏せさせたのだといふ。

など、美しいエピソードも添えられるのである。

戦時中の「花嫁」の語がいかに戦時色に塗りつぶされていたか、いかに平時の花嫁の語の使い方とかけ離れていたかがわかる。

4.3.2 「妻」

ここでは「妻」のつく熟語の「夫妻・良妻・愛妻」は除いて、夫に対応する「妻」だけを扱う。

例52 なごやかな陽を浴びた妻と夫の姿は、何と、早春の田園にふさはしい状景ではないか。(1933/3)

例53 ^{ハズ}夫が奏でる陽気なジャズに合はせて、冷き舗道の上を舞台に若き妻^{ワイフ}は踊り狂ふ。(1933/4)

例54 妻と坊やに見送られ、弁当を持つて出勤。(1935/3)

例55 初めて夫として、妻として、いたはりあひつつさして行くは、新郷土満州。(1939/7)

例56 受付に出頭したけなげな靖国の妻の心意気。(1941/12)

のように使われている。夫と妻を並べて書く場合、例55のように夫が先に書かれるのが普通だが、例52は「妻」が「夫」より先に書かれている。焦点の当て方で妻が先に来ることも大いにありうるのだが、従来の日本語は「男と女」、「夫と妻」、「父と母」など男性が先に来るものとされてきた。1933年当時であって妻が先の例も見いだされたのは、当時はまだその場に応じて女性側の語が先に来ておかまわないというゆるやかさがあったのであろう。

「妻」の語が表れるのは「夫」に対応する場合だけでなく、例54の「妻と坊や」のように、夫からみて子供と一緒に扱いを受ける場合も多い。他にも「妻や子の待つ我が家」などの例があるが、これらは「女」の項で見た「女と子供・女子供」などの用法と共通している。

戦争がまだそれほど緊迫していなかった1933年4月号には^{ハズ}夫と^{ワイフ}妻という外来語のルビのついた「夫」と「妻」が登場する。しかし、40年代になると夫に戦死される「妻」も多くなり、例56のような「靖国の妻」が誕生するのである。

以上、当時の結婚する、また結婚した女性のあり方を表現する語として「花嫁」と「妻」の使われ方をみてきた。結婚という点での共通点の他には類義語と言えるほどの接点はない2語ではあるが、この2語を通して戦時中の「妻」としての女性の姿が垣間見られたと思う。戦争初期の時代には、「妻」として家庭を護り子供を育てて勤めに出ている夫の帰りを待つ平和で穏やかな女性像の1つであり、「妻」が「夫」より先に表現されることもあったが、戦争が激しくなると、その夫の死をけなげに受け入れる「靖国の妻」になっていく。「花嫁」の語は、「花嫁衣装」「花嫁学校」などの複合語としても用いられるが、人生におけるビッグイベントを飾るあこがれの「花嫁衣装」も「綿服」であったり、産業組合のレンタルで1円で借りる質素なものの時代になっていた。また、「花嫁」は、大陸開拓に駆り出された男性たちの配偶者として、見知らぬ夫となる人の元へ送られる戦略物資としての存在であった。そうした女性たちを訓練し養成する機関が必要となって創立されたのが「花嫁学校」であり「花嫁訓練所」であった。平時であれば、新婚生活に対する不安や期待、愛する人と共に過ごせることになる喜び、家庭人としての責任な

ど、さまざまな感慨を連想させる「花嫁」の語であるが、戦時中では実に殺風景な戦争遂行のための人員としての役割を持つ語として使われていたのである。

5. おわりに

戦時中のことばを切り取る切り口や方法は他にもある。語彙全般を語種別に分けて現代語との分布状況の差を知ること、戦時中の語に特徴的な戦争や軍事に関する語彙をその意味用法が現在と同じか否かを知ること、修飾語や修辭法により当時の表現方法の特徴を知ること、造語の方法を現在のそれと比較すること、などなど、同じ資料から調査研究したいことは尽きない。

今回は女性のことばに限定したが、それをより全体的に見るには当然、男性のことばも見なければいけない。また、「戦争・女性・ことば」という歴史的事実とジェンダーとことばと不即不離に絡みあう3つの側面からの考察には、まだまだ序の口にたどり着いたばかりでその方向も方法も見出せていないことを、ここにきて改めて感じている。登りたい山が決まって、その登山口を探すところにやっと立ったところで、稿を終える。

注

- (1) 遠藤織枝ほか (2004) 『戦時中の話しことば—ラジオドラマ台本から』 ひつじ書房
- (2) 若桑みどり (1995) 『戦争がつくる女性像』 筑摩書房 p. 53
- (3) 共同通信社発行の『記者ハンドブック第10版』 (2006) の差別後・不快語の項目には、「女流」の語は、『女流名人』などの固有名詞以外は使わない」と記されている。(p. 494)
- (4) 『岩波国語辞典』では第4版まで見出し語としていたが、第5版以降採録していない。
- (5) むらき数子 (2004) 「足らぬ足らぬは工夫が足らぬ—生活現場での主婦たちの戦い」 (岡野幸江ほか編『女たちの戦争責任』 東京堂出版 p. 69)
- (6) 三國一朗 (1985) 『戦中用語集』 岩波新書 p. 98
- (7) 田中和子・諸橋泰樹 (1996) 「新聞は女性をどう表現しているか」 (田中和子 諸橋泰樹 編著『ジェンダーからみた新聞のうら・おもて—新聞女性学入門—』 現代書館 p. 40)

引用文献

家長三郎(1985)『戦争責任』岩波書店 p. 297

加納実紀代(2004)「白の軍団『国防婦人会』—女たちの草の根ファシズム」(岡野幸江ほか
編『女たちの戦争責任』東京堂出版 pp. 4-12)

加茂正一(1944)『新語の考察』三省堂 p. 13

雑誌研究委員会編(1952)『雑誌の話』日本雑誌記念会館内 雑誌週間実行委員会発行

佐藤卓巳(2002)『キングの時代 国民大衆雑誌の公共性』岩波書店

(えんどう おりえ)